

十島村教育委員会だより 平成31年1月号

せわやがトカラ情報

南北160km
「心をつなぎ

気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会
〒892-0822 鹿児島市泉町13番13号
TEL 099-227-9771

1月・・・新成人を祝う会

十島村教育長 有村孝一

1月14日は成人の日です。43市町村でこの日に成人を祝う会を実施するのは、十島村だけです。そのせいか、多くのマスコミの方々も来ていただき、役場の大会議室が満員状態でした。



今年の新成人の対象者は、11名でした。その内7名の皆さんが参加して「新成人を祝う会」が開催されました。

参加したのは、諏訪之瀬島に山海留学をしていた永井義隆さんと宮脇麗也さんが鹿児島市から、平島に山海留学をしていた日高悠斗さんが都城市から、悪石島出身の有川美紀さんが鹿児島市から、悪石島在住中の久永航希さん。小宝島に山海留学をしていた早川千穂さんが大垣市から、宝島に山海留学をしていた原之園優汰が大阪市からです。

式典では、肥後正司村長が、「トカラで育ったことを誇りに思い、これからは謙虚に努力を続ける成人となってください。」と式辞を述べられました。これに対して新成人からは、次のような抱負が述べられました。

永井さんは、「今、大工の専門学校に通っている。就職も内定し今春からは、本格的に社会人として頑張っていきたい。」宮脇さんは、「県外に就職が内定した。これからは、何事にも精一杯がんばっていく。」日高さんは、「ここまで育ててくれた親に対して、親孝行をしていきたい。お金もしっかりためて、社会に貢献していきたい。」有川さんは、「まだ学生なので成人の実感はあまりない。4月からは看護師として社会人となる。今後経験を積み、悪石島に戻り離島医療に貢献していきたい。」久永さんは、「昨年ボゼがユネスコの文化遺産に登録された。関わっている者として、とてもうれしいことだ。これまで成長できたのも皆さんのおかげだ。とりわけ、母には、たいへん世話になっている。恩返しをしていきたい。」

早川さんは、「人生の節目の成人式を迎えることが出来た。この20年間明るく小2から8年間小宝島で過ごした。今、看護師を目指して全力で取り組んでいる。世話になった方々に恩返しができるようにしたい。」原之園さんは、「今、大阪で仕事をがんばっている。これからは、自立できるようにさらに努めていく。恩師に会えて感無量。島での経験があったから今がある。」と話してくれました。7人ともすごく自覚して、よく考えていると思えました。そして今後の抱負を堂々と話してくれました。参加した保護者、恩師、トカラふるさと会の方々は、目の前の新成人の頼もしい姿に触れ、新成人の前途

を期待する温かい眼差しで見守っていらっしゃいました。また、テレビ会議システムで参加した各島の方々も、久しぶりに会った新成人の方々とモニター越しに話が弾んでいました。語らいの時間はあっという間に過ぎてしまいました。将来この7人が、何らかの方法で、十島村と関わっていくことが出来たらありがたいと思います。



シリーズ——十島村で学ぶ1 「小宝島に来てできるようになった」 小宝島中3年 柊中 翔太

小宝島に来て、もうすぐ1年が過ぎようとしています。今は高校進学に向けて、毎日受験勉強を頑張っています。

昨年1月に小宝島に来たとき、「学校のみならず仲よくできるか。」「勉強についていけるか。」など、不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、それは杞憂でした。実際に生活すると、みんなが優しくしてくれたり、休みの日に先生が魚釣りに連れていってくれたりして、仲よくなることができました。また、テストの成績も次第によくなり、とてもうれしかったです。小宝島に来てから楽しんでいることがたくさんあります。

一つめは、「自然にふれること」です。海水浴場で水泳学習をしたり、港に行って魚釣りを楽しんだりすることができました。

二つめは、「将棋やオセロをすること」です。昼休みに校長先生や友達と楽しんでいて、受験勉強のいいストレス発散にもなっています。

他にもネコと遊んだり、友達と島を歩いたりして小宝島での生活を満喫しています。

私が小宝島で生活できるのも残りわずかとなりました。私は、高校に進学し、その後大学に進学して司書の免許を取得しようと思っています。

私の将来の夢は、「司書になること」です。その理由は、本が好きであることと、以前通っていた学校でお世話になった司書の先生ようになりたいと思ったからです。

その夢を叶えるために、まずは志望校に合格できるように頑張りたいと思います。そして、残された小宝島での生活を楽しまたいです。

南日本柳壇(平成30年11月30日掲載)

文化祭感動の花咲かせたよ

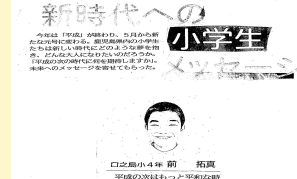
濱田一馬(諏訪之瀬島小5年)



子供のうた(12/24)

えんとつから
ゆっくり ゆっくり
入りこむ
顔は真っ黒

「やっと来た」
悪石島小3年 有川美ひろ
プレゼントおいたら
さあ 行こう
ゆっくり ゆっくり
えんとつ 上がる
顔が 真っ黒



シリーズ——十島村で学ぶII 「平島での体験を通して」 平島中2年 池田美夕

私が平島に来て、1年半が経ちました。平島に来て、一番驚いたことは「一件もお店が無かった」ことです。その驚きと同時に、「お店が無くて不便では無いのか?」という疑問を抱きました。実際に生活してみると、私が思っていたより不便では無いこと、ものが無くても、自分なりに工夫すれば、楽しく過ごせることが分かりました。

そして、平島には神様を祀る習慣があり、たくさんの方に参加する機会があります。その中でも私が一番思い出に残っているのは、「カセダウチ」です。カセダウチは福徳神という神様が五穀豊穡や家内安全を願ひ、各家庭を回ります。その際に、子どもたちは福徳神にへドロ(墨のようなもの)を塗られないように水をかけて全速力で逃げます。結局はつかまってしまい、みんな塗られてしまいました。でもみんなでたくさん走り回って、とても楽しかったです。学校行事では、島豆腐作りが1番思い出に残っています。島民の方を講師に招き、みんなで協力して豆腐を作りました。にがりの代わりに海水を入れると固まる豆腐をみて、すごいと思いました。できたての豆腐はとてもおいしかったです。

私は平島に来年もいる予定です。先輩として、新しく来る山海留學生に私が平島で経験したことを伝え、受け継がれるように、そして平島での生活を大切にいろいろなことに挑戦したいです。



シリーズ——新聞に投稿「若い目」 (12月11日掲載) 悪石島小6年 森木洋那

が、なだてに動場一瞬がなでいれ緊で録学
、「いつ見書がい悪のパ今つおてよてギ張のが文今
今宿自たえかこつ石出ッにてp大発いユ感語決化日
日題分んるれみば島来ともいtき表るッはしま機
だいがだて上いお事赤破るeくの。とと合る関私
けやい「世いげにめにいれ手d深時足にてい。の
はだたと、界たて広で、文つに「呼がもぎもはモユ住
特別と人認「きがとたがそく認をつるしくクリス悪
に言生め。大「信テラド」すてぶめ伝分シコ石
に感初らで手きとじレだ。クとるきるたわかヤ島
てのっ「ぎ手役が、画わば面私るめ、い行形ゼ
いたのりで場、つ決にはえで。がわ文が
いづもにう字めよらきて現、きだ文胸いう島で遺国
の言いがてうの、れたて。字にるの民い産連
帰葉う「いや声な。胸で手紙全るへ教
りもこ輝たくとい心に「をいが員英の育
道出とい紙感会。一臟重A当よぬの語登科

初めての特別を経験

ひろば (H 30.12、16 南日本新聞掲載) 「ボゼの無形文化遺産登録を喜ぶ」

林 弘

十島村悪石島の仮面来訪神「ボゼ」が国連教育科学文化期間(ユネスコ)の無形文化遺産に登録された。45年前、悪石島中学校赴任し、初めてボゼに出会った時は怖ろしく、ものかげから、そっとのぞいていた。

島民がみんな集まっている。不気味な太鼓の音を合図に、棒を持ったボゼが足早に現れ、島民の誰それとなく襲う。女や子供は悲鳴をあげる。当時1歳の長男は母親にしがみついた。ひととき大あばれした後、ボゼは去って行った。ボゼの起源や意味を、県内外どころか世界の民俗学者が研究し文献に残している。

島の人々は謙虚で働き者だ。椋鳩十の作品の中に「悪石島の少年」という小品がある。戦後間もない頃、島を訪れた時に宿泊した家の少年に朱エンピツをあげようとしたが、受け取らなかったという筋書きだが実話らしい。島民のプライドを傷つけることは禁物である。

ある時期、人口減少で一時学校が休校になったこともあったが、ボゼが中止になったことはない。ここ数年島の人々と島を離れた人たちのために「潮風通信」を発行してくれる人もいて、悪石島の絆は強い。

ボゼの神秘性よいつまでも(鹿児島市)



ひろば (H 30.12、1 南日本新聞掲載) 「方言の背景にある地域の特色」

教員 腰 俊昭

中学2年生の国語で「方言と共通語」という題材がある。先日の授業では、さまざまな言葉の使われ方や特色を、生徒と話し合うことができた。

現在、私が担任している中学1・2年学級の3人は宝島、鹿児島県内、東京都と、それぞれ出身地が異なっている。私自身も北九州市の出身であり、ちょっとした言葉の違いやアクセントに、話が盛り上がることが多い。

私たちが使う言葉には、その言葉が生まれ、その土地になじんできた背景が必ずあるはずである。言葉に敏感になり、おの違いを知らうとすることは、多様な見方や考え方に触れる大変良い経験であると思う。

私もこれまで赴任してきた学校で、さまざまな言葉に触れてきた。保護者や地域の人たちとの何気ない語らいから話題が広がり、地域の特色を知る事ができたことが何度もあった。

これからもたくさんの方との出会いの中で多くの言葉に触れることができるだろう。お互いの言葉に関心を持って耳を傾け、丁寧に感じとることができる感覚を、絶えず磨いていきたい。(十島村)